

宇土城跡（西岡台）Ⅶ

—発掘調査・保存整備事業概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第25集

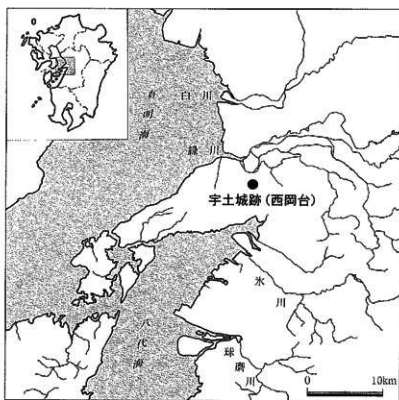
2004年3月

熊本県宇土市教育委員会

宇土城跡（西岡台）Ⅶ

—発掘調査・保存整備事業概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第25集



2004年3月

熊本県宇土市教育委員会

序 文

本書は宇土市教育委員会が実施した宇土城跡（西岡台）の発掘調査と保存整備工事の概要報告書です。

宇土城跡は昭和54年3月に国指定史跡となり、56年度より整備事業を開始しました。現在、第1ブロック（西岡神社北側地区）の整備を完了し、第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の発掘調査と整備を続けています。

宇土城跡の主郭である千畳敷の発掘調査では、多数の掘立柱建物跡や櫓列跡、門跡などを検出しました。さらに、千畳敷を囲む横堀跡が未完成であり、掘削単位（小間割）が残されていたことや、石塔を用いた城破りを九州で初めて確認するなど、今後の中世城郭の研究に影響を与える重要な成果が得られています。また、出土した土師質土器や瓦質土器、海外から輸入された陶磁器は、宇土城跡での生活の様子を今に伝える貴重な資料といえるでしょう。

保存整備については、発掘調査の成果を反映し、正しい歴史認識に基づいた整備を行うため、史跡宇土城跡保存整備検討委員会の協議を経て事業を進めています。第2ブロックに関しては、平成15年度までに掘立柱建物跡の平面・立体表示や横堀跡の復元、城破りに用いられた石塔の野外展示などの遺構整備、トイレや広場などの便益・休養施設の整備を行いました。

最後になりましたが、発掘調査ならびに整備にあたってご指導・ご協力いただきました文化庁記念物課ならびに熊本県教育委員会文化課、保存整備検討委員の先生方をはじめ、関係各位の皆様方に心より感謝申し上げます。

平成16年3月

宇土市教育委員会
教育長 坂本光隆

例 言

1. 本書は国・県補助金を得て宇土市教育委員会が平成15年度に実施した宇土城跡保存修理事業に伴う主郭（千畳敷）周辺の発掘調査（16次調査）、平成14年度に実施した保存整備工事の概要報告書である。
2. 調査地は熊本県宇土市神馬町字千畳敷579・624に所在する。
3. 発掘調査は藤本貴仁（宇土市教育委員会文化振興課技師）が担当した。
4. 遺構実測図作成は林和美・森川美和子・藤本が行ない、一部を(株)ダイチプラン・(株)九州航空に委託した。
5. 遺構写真撮影は藤本が行い、空中写真撮影は(株)九州航空に委託した。
6. 遺構実測図の製図は淵上幸恵・藤本が行った。
7. 本書で用いたレベルは海抜絶対高、方位は座標北（座標第Ⅱ系、旧座標）である。
8. 保存整備工事は(株)平田建設・(合)浦野商会・(有)プラムテックが実施し、設計・監理は(有)中川建築設計事務所に委託した。
9. 本書の執筆・編集は藤本が行った。
10. 出土遺物・その他関連記録は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査にいたる経緯と経過	1
第2節	調査の組織	1
第2章	位置と環境	3
第1節	位置と歴史的環境	3
第2節	縄張りとは発掘調査の概要	4
第3章	調査の成果	5
第1節	調査の概要	5
第2節	遺構と出土遺物	6
第4章	まとめ	12
第5章	保存整備工事	13
第1節	基本方針と全体計画	13
第2節	事業の経過	15
第3節	平成14年度整備工事	17

挿図目次

第1図	宇土城跡縄張り図 (s=1/5,000) …… 3	第5図	周辺ゾーニング図 (s=1/25,000) …… 14
第2図	T1502遺構図 (s=1/100) …… 7	第6図	整備地区別名称 (s=1/5,000) …… 14
第3図	1601区遺構図 (s=1/80) …… 9	第7図	トイレ立面・屋根伏図 (s=1/80) …… 19・20
第4図	1603区遺構図 (s=1/100) …… 11	第8図	トイレ平面詳細図 (s=1/50) …… 21・22

表目次

第1表	保存修理の経過……………	16
-----	--------------	----

写真目次

写真1	宇土城跡空中写真(北東より) …… 2	写真9	1602区調査前状況(北より) …… 8
写真2	16次調査区空中写真(上が北) …… 5	写真10	1602区空中写真(上が南) …… 8
写真3	T1502空中写真(東より) …… 6	写真11	1603区調査前状況(北より) …… 10
写真4	塹壕跡SD19(北東より) …… 6	写真12	1603区空中写真(南西より) …… 10
写真5	溝状遺構SD20(東より) …… 6	写真13	横堀跡SD06検出状況(北より) …… 10
写真6	1601区調査前状況(北西より) …… 6	写真14	SD06土層断面(北より) …… 10
写真7	1601区空中写真(上が南) …… 8	写真15	千畳敷周辺整備状況(南西より) …… 13
写真8	SD18土層断面(南西より) …… 8	写真16	トイレ竣工写真(東より) …… 17

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯と経過

昭和49年1月、市立鶴城中学校の改築移転に伴い、その移転用地として宇土城跡¹⁾の所在する独立丘陵（通称：西岡台）をあてることが市関係機関の協議によって決定した。同年3月から51年3月まで行われた発掘調査の結果、古墳時代前期から中期の巨大な首長居館を囲む堀跡、宇土城跡主郭（千畳敷）の横堀跡、掘立柱建物跡などの数多くの遺構を検出し、古墳時代・中世を中心とする多量の遺物が出土した。この成果を受けて遺跡保存の気運が高まり、宇土城跡は史跡公園として保存されることが決定し、中学校移転は中止となった。

昭和54年3月12日の官報告示によって国史跡に指定され、56年度には保存整備の基本計画である『史跡宇土城跡環境整備計画』を策定した。本書では宇土城跡を第1～5ブロックに地区割し、ブロックごとに遺構表示・休憩施設などを計画した。第1ブロック（西岡神社北側地区）は、平成元年度におおむね整備を完了し、現在継続中の第2ブロック（千畳敷および周辺地区）の整備は、平成元年度より着手している。第3～5ブロックは、一部で防災工事が行われたほかは未着手である。

史跡整備を目的として第2ブロックの発掘調査を開始したのは、平成2年度の4次調査からである。現在までほぼ毎年調査が行われており、千畳敷において多数の掘立柱建物跡が検出されたほか、虎口や門跡、横堀跡の調査を実施した。また、千畳敷を圍繞する横堀跡が未完成であることや、虎口周辺部で石塔を用いた城破り跡を確認するなど注目すべき成果が得られている。

9年度には、学識経験者で構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会が発足し、宇土城跡の調査成果や歴史的背景、歴史公園としての位置付けを考慮した整備を進めている。本委員会の指導・助言に基づき、10年度に『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』を策定し、17年度に第2ブロックの整備を完了する予定で事業を進めている。

第2節 調査の組織（敬称略、平成15年度）

調査主体 宇土市教育委員会

事務局 高木恭二（文化振興課長）、山本和彦（主幹・文化財係長）、松田安代（文化財係参事）、
下田志穂里（同参事）、藤本貴仁（同技師、発掘調査・整備担当）

史跡宇土城跡保存整備検討委員会

北野隆（委員長、熊本大学工学部）、服部英雄（九州大学文学部）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部）

調査指導・協力者

本中真・市原富士夫（文化庁文化財保護部記念物課）、木村元浩（熊本県教育委員会文化課）、鶴田倉造・濱口俊夫・根本なつめ・吉田恒・佐藤伸二（宇土市文化財保護

審議会)、村田修三(大阪大学名誉教授)

調査・整理作業員(五十音順)

芥川一由、石上春代、宇野富士雄、岡本逸子、奥村美栄子、小畑律子、白石節子、
田中国義、田中由美、中川道治、橋本チエ子、林和美、福田フミエ、淵上幸恵、古
山節子、本田栄子、松舟種雄、村山艶子、森川美和子、山形ユキコ、山田敏江

註

- 1) 西岡台の東約300mの低丘陵には、戦国大名小西行長が築城した近世の宇土城跡(城山)が所在する。中世の宇土城跡は、これと区別するため宇土城跡(西岡台)や宇土古城と呼ばれているが、本書では便宜的に「宇土城跡」とは中世の宇土城跡を指すものとする。



写真1 宇土城跡空中写真(北東より)

第2章 位置と環境

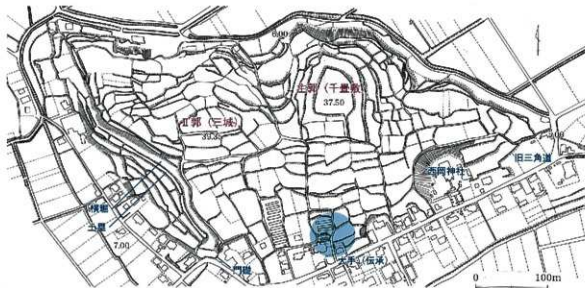
第1節 位置と歴史的環境

宇土城跡は中世宇土に拠点を置いた在地領主・宇土氏と名和氏の居城である。城跡は熊本県の中央部を貫流する緑川によって形成された沖積平野の西側、通称「西岡台」と呼ばれる標高約39m、東西約750m、南北約400mの独立丘陵に位置する。『三宮社記録』によれば、永承3年（1048）に築城され、以後、菊池氏一族があいついで宇土城にいたとされているが（井上1977）、それを証明する同時代の文献や考古学的根拠は残されていない。一方、廃絶時期は小西行長が天正16年（1588）に宇土城主となり、翌年に新城（近世宇土城跡）の工事を着手した天正17年（1589）から関ヶ原の戦いで敗死した慶長5年（1600）の間と推察される。

宇土氏は宇土荘の荘官の地位にあった菊池氏一族と伝えられる在地武家領主であり、宇土高俊が文献上での初見である。正平3年（1348）に征西將軍懐良親王を宇土津（推定地：宇土市椿原町）に迎え入れており、南朝方として活動した。以後、宇土氏については引き続き本拠を維持したとみられるが、文龜3年（1503）、宇土為光が守護職をねらって守護菊池能運と争い失敗、滅亡した。

名和氏は代々伯耆国長門邑を領した有力武家である。名和長年の孫顕興は、正平13年（1358）、一族を挙げて伯父義高が建武の恩賞（元弘の変の勲功）として得た肥後国八代庄に移り、南朝方として活躍した。以後、八代を中心として南北に勢力を伸張したが、文龜4年（1504）、名和顕忠は居城の八代市古麓城を菊池氏・相良氏によって追われ、下益城郡富合町木原城に一時移るが、その後、宇土氏滅亡後の宇土城に入った。

以後、名和氏は木原城のほか宇土市田平城・下益城郡城南町阿高城・下益城郡松橋町豊福城・宇土郡三角町矢崎城など陸上・海上交通の要衝に支城を配した。名和氏が宇土を拠点としてからも



第1図 宇土城跡縄張り図（調査前：昭和49年測量、S=1/5,000）

相良氏とは争いが絶えず、豊福城をめぐる幾度となく争ったことが相良氏の日記風記録『八代日記』に記されている。豊福城周辺は甲佐から宇土半島へと通じる街道と、八代から隈本へと通じる街道との交錯地という交通の要衝に位置したことが、その理由のひとつとしてあげられる。

天正15年（1587）、豊臣秀吉の九州平定に伴ない名和顯孝は宇土城を開城した。その後、顯孝は筑前国内に替地入替となり、江戸時代になると顯孝の子孫は柳河立花藩士として存続した。天正16年には、人吉・球磨を除く肥後南半部を治めた小西行長が宇土城に入ったが、翌年には新城の築城と城下の整備に着手した。

第2節 縄張りと発掘調査の概要

宇土城跡の曲輪は、西岡台の東西に並んだ2つの高位部に所在する。東側が「千疊敷」と呼ばれる主郭であり、標高約37m、東西約50m、南北約65mの削平地である。発掘調査によって多数の掘立柱建物跡や欄列跡・門跡・虎口跡・横堀跡・塹壕跡を確認した（平山・高木ほか1977、藤本2000・2001・2002・2003）。西側は「三城」と呼称されるⅡ郭であり、標高約39m、東西約80m、南北約35mの削平地で、掘立柱建物跡や門跡・道跡・溝跡を確認した（平山・高木ほか1977、木下・元松1988）。これら曲輪の周囲は、切岸によって急峻な崖状地形を造り出し、これと帯曲輪のセットを連続して配することによって曲輪を防御している。

上述した遺構から、大量の土師質土器や播鉢・火鉢などの瓦質土器、備前焼や瀬戸焼、中国製の白磁・青磁・染付や華南三彩、タイ産や朝鮮半島製の陶磁器など、13～16世紀を中心とする陶磁器が出土した。

三城の西側約50mには「カラホリ」と呼ばれる長さ約310m、幅約10～15m、深さ約5～7mの巨大な横堀が南北方向に配置され、その西側に並行して高さ2m程の土塁がある。この横堀は、発掘調査で堀底に側溝を有することや門の礎石とみられる石材が確認されており、中世以来の古道である三角道と交わることから、平時には堀底道として利用されていたと考えられる。丘陵南側は比較的幅広い削平地が階段状に連続する地形をなし、大手と伝えられる地点もある。この場所や置に領主や家臣団、一般民衆が居住する麓集落が形成されていたと考えられる。

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

16次調査では、1601～1603区の3つの調査区を設定し、平成15年7月下旬から同年10月上旬に実施した。あわせて15次調査のT1502で検出した竪堀跡SD19の追加調査を行った。

15次調査の所見や現況地形の観察の結果、SD19は西岡台の丘陵裾部まで延びる可能性が高いことが判明した（藤本2003）。これを受けて、SD19と配置状況や形態が類似する千畳敷北側の帯曲輪を分断するように配される竪堀跡SD18⁹も同じく北側に延びると想定されたことから、1601区を設定して確認調査を行った。また、7・12・14次調査で、千畳敷の虎口周辺において石塔残欠の大量投棄を伴う

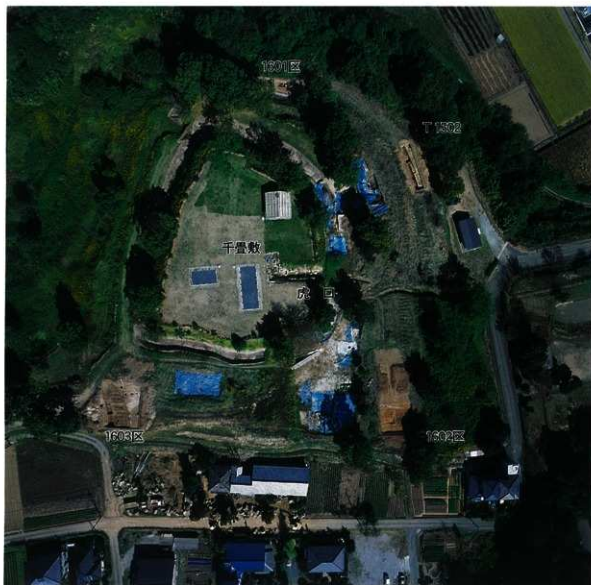


写真2 16次調査区空中写真（上が北）



写真3 T1502空中写真(東より)



写真4 壑堀跡SD19(北東より)



写真5 溝状遺構SD20(東より)



写真6 1601区調査前状況(北西より)

城破りを確認したが、この石塔群が本来所在した地点と推定される帯曲輪に1602区を設定した。1603区では、千疊敷を囲む横堀跡SD02の外側に配される横堀跡SD06の未調査部分の範囲確認を行った。

第2節 遺構と出土遺物

(1) T1502

SD19(第2図、写真3・4)

北東—南西方向に主軸をもつ壑堀跡である。

14・15次調査と現況地形の観察の結果、本遺構は西岡台の丘陵裾部にまで達し、千疊敷北側と東側の帯曲輪群を分断する大規模な壑堀跡と判断した。

15次調査ではカクラン溝の埋土を発掘し、北側の掘り方と対応する下端や底面のごく一部を確認しただけで、もう一方の掘り方や下端、埋土の状況は確認できなかった。今回の調査では、これらを確認することを目的とした。

検出規模は上幅約10.1m、底幅約6.7m、深さ約2.0mの断面逆台形を呈する。南側は北側にくらべ浅く、周辺に重複した大型ピットを検出した。南側と北側の掘り方の高低差がかなりあるが、これが当初からか、廃城後に南側掘り方周辺が改変されたのかは明らかにすることができなかった。埋土から中世の土師質土器、瓦質土器、青磁、白磁、染付が出土した。

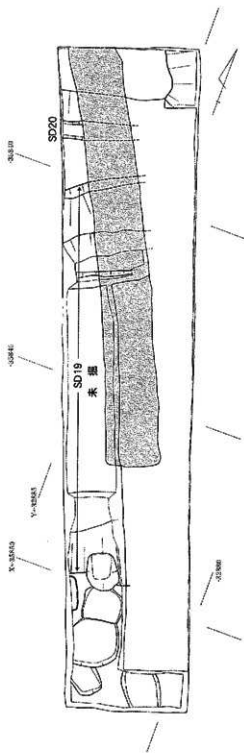
SD20(第2図、写真5)

SD19に平行する小さな溝跡である。上幅約0.4m、下幅約0.2m、深さ約0.3mでSD19と同様に北東側に向かって傾斜する。検出状況からSD19に関連する遺構と思われるが、調査範囲が限られているため性格等は不明である。

(2) 1601区

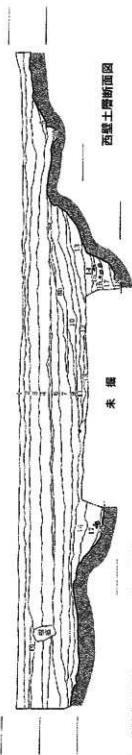
SD18(第3図、写真6～8)

千疊敷北側に位置し、SD02の掘削に伴いSD02と



米 掘

24.00m



西郷土開拓地区

米 掘

0 4m

- 1 淡青色シルト質土
- 2 黒褐色シルト質土
- 3 黒褐色シルト質土
- 4 黒褐色シルト質土
- 5 黒褐色シルト質土
- 6 黒褐色シルト質土
- 7 黒褐色シルト質土
- 8 淡青色シルト質土 (①) 帯状土
- 9 淡青色シルト質土 (②) 帯状土
- 10 淡褐色シルト質土
- 11 褐色シルト質土
- 12 褐色シルト質土
- 13 褐色シルト質土
- 14 淡褐色シルト質土
- 15 淡褐色シルト質土
- 16 オリーブ褐色シルト質土
- 17 褐色粘土
- 18 褐色粘土
- 19 淡褐色粘土
- 20 褐色シルト質土

第2図 T1502透視図 (S = 1/100)



写真7 1601区空中写真(上が南)



写真8 SD18土層断面(南西より)



写真9 1602区調査前状況(北より)



写真10 1602区空中写真(上が南)

の境界部分が埋め戻されたと考えられる南北主軸の竪堀跡である⁴⁾。1601区での検出規模は長さ約4.4m、上幅約3.3~5.8m、底幅約2.2m、深さ約1.2m、壁面の傾斜角度は約35°の断面逆台形の箱堀状を呈する。底面は南から北に向けて緩やかに下降している。土層断面確認のため埋土を掘り下げたところ、拳大や人頭大の安山岩塊石の投げ込みを確認した。SD02との境界部分でも同様の投げ込みを確認しており、SD18を埋め戻しに伴い行われた可能性が高い。埋土から中世の土師質土器、瓦質土器、青磁、染付が出土した。

(3) 1602区(写真9・10)

本調査区周辺に墓地跡が所在したと想定したのは、1次調査で鎌倉期の墓坑と報告されたSK01とSK02を調査区隣接地で検出したことがあげられる(平山・高木ほか1977)。また、投棄された石塔の多くが、南北朝期を中心とした形式であり、SK01とSK02と时期的に近いことがあげられる。

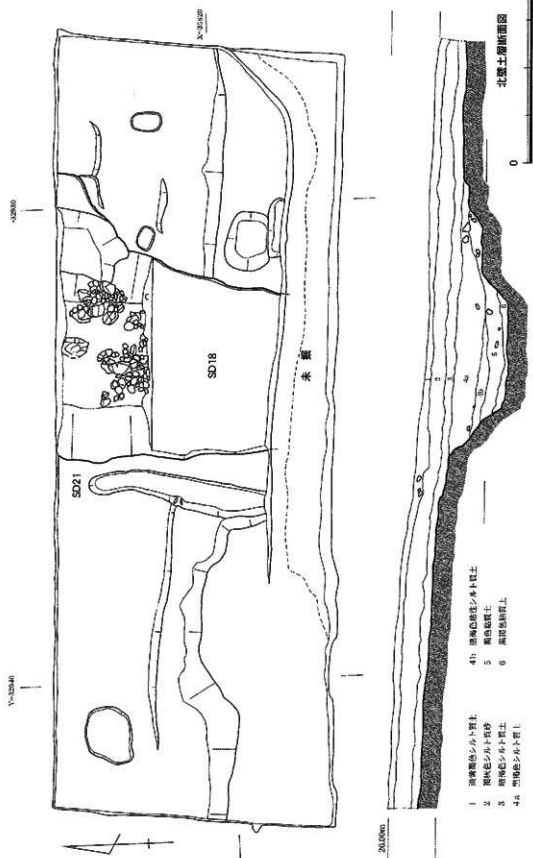
しかし、調査の結果、散在的に分布するピットを検出しただけで、墓地跡を裏付ける遺構・遺物を検出することはできなかった。また、石塔の破片もほとんど出土しなかった。

(4) 1603区

SD06(第4図、写真11~14)

1次調査において、千畳敷を圍繞するSD02の外側に並行する小規模な横堀が配置されることは以前から明らかにされていたが(平山・高木1977)、南側の一部が調査区外だったため内容は明らかにされていなかった。保存整備の関係上、この未検出部分を把握する必要があったため調査を実施した。

検出全長は約15.4m、上幅約1.6~2.9m、底幅



第3図 1601区遺構図 (S = 1/80)



写真11 1603区調査前状況（北より）



写真12 1603区空中写真（南西より）



写真13 横堀跡SD06検出状況（北より）



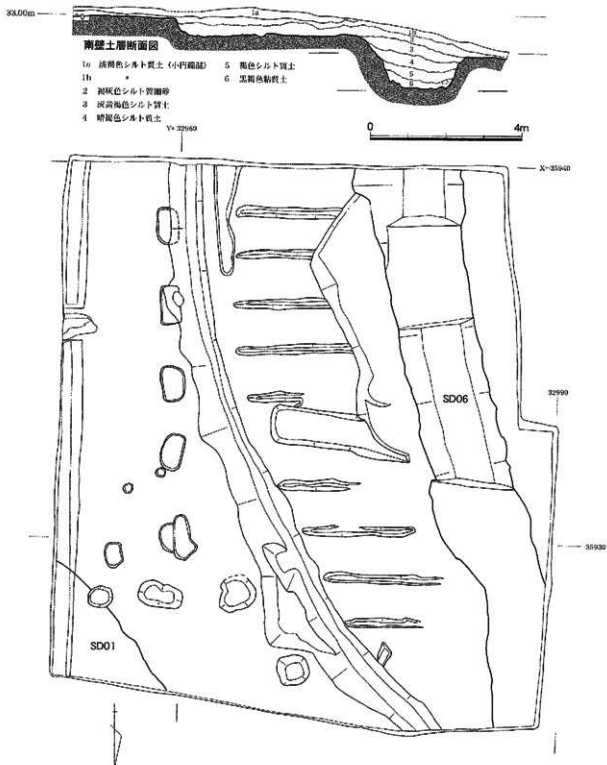
写真14 SD06土層断面（北より）

約0.9～1.1m、深さ約0.9～1.5mの断面逆台形の箱堀状を呈する。壁面の傾斜角度は約55°～65°である。南北方向に主軸をもち、南側に向かってゆるやかに下降している。現状では、調査区南側は高低差2.5m程の崖であるが、第1図の昭和49年（1974）作成測量図と現況地形を見比べると、この部分は大幅な地形改変を受けたことがわかる。この崖斜面からSD06の断面を確認した。埋土から中世の土師質土器、瓦質土器、染付、銅銭が出土した。

また、本遺構の西側約6m離れて南北棟の掘立柱建物跡とみられる柱列を検出した。桁行は4間で規模は約8.4mであるが、梁行や一方の桁行、その他の構造的特徴は不明である。

註

- 1) 以前は竪堀状遺構として報告（藤本2000、藤本2003）したが、今回の調査で竪堀跡であることがほぼ確実となった。
- 2) SD02とSD18の境界付近の詳細は藤本2003で報告。



第4図 1603区遺構図 (S = 1/100)

第4章 まとめ

16次調査では、前回の調査で確認できなかったSD19の南側掘り方と、並走する側溝状の溝跡を検出した。本遺構が丘陵裾部まで達するであろうことは既に指摘したが、この遺構の性格についてはいくつかの問題点がある。

そのひとつに、規模がかなり大きいため千疊敷周辺の遺構群のなかでは、その存在が異質のようにみえる。この点から、崖崩れなどの自然崩壊によって生じた可能性も考慮すべきとの指摘があった¹⁾。仮に自然崩壊で生じたとしても、遺構の状況から明らかに人の手が加わっていることは間違いない。また、SD18のような堅堀跡や、開渠跡として報告（藤本2000）したSD17の存在は注意すべきである。さらに、千疊敷東側帯曲輪のSD03も千疊敷東側の土橋付近で東方向に直角に折れて堅堀として機能するようである。個々の遺構の継続時期を詳細に検討する必要があるなどの課題も残るが、これらの存在は千疊敷を取巻く帯曲輪群を分断する堅堀がいくつか配置されたことを示唆するのではなからうか。

また、千疊敷虎口周辺の城崩りに用いられた大量の石塔残欠は、当初、1602区付近から運び込まれたと想定していたが、これが否定される結果となった。西岡台周辺を含め、比較的広範囲から運び込まれたことも視野に入れて再検討する必要がある。

1603区の調査では、SD06が南側崖面まで延びることを確認した。SD06南端付近には伝大手から通じる古道が存在するが²⁾、千疊敷に至るにはこの古道を通らざるを得ない。そのために道の周辺は切岸やSD06で守られていると推測される。つまり、SD06と切岸、古道との関係に有機的なつながりがあることを予測させ、一種の虎口的な機能があったとの想定も可能であろう。

註

- 1) 村田修三氏より、SD19の存在は千疊敷の縄張りを考えるうえで整合性を欠くとの指摘があった。また、1978年の宮城東沖地震に伴い、西岡台のような低丘陵地での崖崩れ発生していることを例にあげて、SD19同じような崖崩れによって生じた可能性を示唆された。この種の地層りは、緩傾斜地の頂上付近がやや急になるあたりで崩れが起き、その勢いで山腹をやや幅広く削りながら滑り落ちるという。
- 2) この道は途中で分岐し、一方は千疊敷方面、もう一方は三城方面に進路を変える。三城方面の道は、1次調査によって中世の門跡に伴うことが確認されている（平山・高木ほか1977）。このことから、千疊敷方面の道も中世より機能していた可能性が高い。

【引用・参考文献】

- 平山修一・高木恭二ほか 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
井上 正 1977「宇土城の歴史」『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
木下洋介・元松茂樹 1988『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集
藤本貴仁 2000『宇土城跡（西岡台）』Ⅲ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集
藤本貴仁 2001『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集
藤本貴仁 2002『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第23集
藤本貴仁 2003『宇土城跡（西岡台）』Ⅵ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集

第5章 保存整備工事

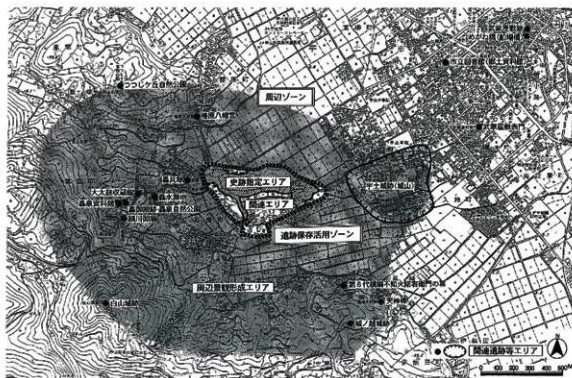
第1節 基本方針と全体計画

中世宇土における大きな歴史的舞台となった宇土城跡を、史跡としての本来の価値を損なうことがないように、遺構の保護を大前提として整備を進めるとともに、発掘調査の成果を十分反映し、中世城としての特色を最大限引き出した整備を行うことを基本方針としている。

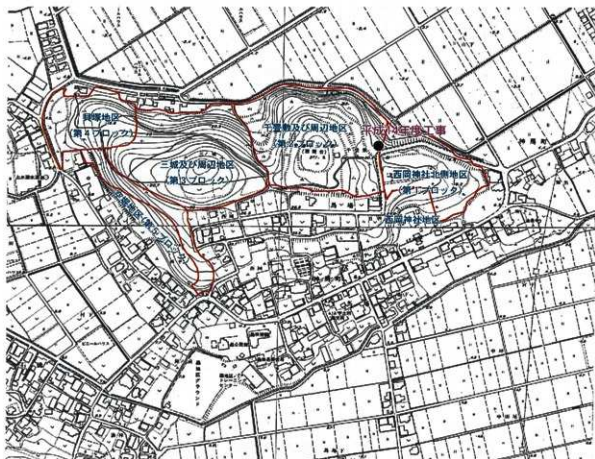
ゾーニングについては、遺跡保存活用ゾーンと周辺ゾーンに大別される（第5図）。前者は、宇土城に関する遺構の分布が想定される地区である。後者は、宇土城周辺の史跡や資料館などが有機的に機能し、歴史的・文化的ネットワークを形成する地区といえよう。



写真15 千疊敷周辺整備状況（南西より）



第5図 周辺ゾーニング図(S = 1/25,000)



第6図 整備地区別名称(S = 1/5,000)

このうち、遺跡保存活用ゾーンは①史跡指定エリアと②関連エリアに分けられる。①では整備地区の第1～5ブロックが含まれ、遺構の保存ならびに活用整備を優先的に行う。②では史跡の追加指定や用地の公有化に努めるとともに、発掘調査等による遺構の解明を行い、史跡指定地と一体となった保存活用整備を図る計画である。

第2節 事業の経過—第2ブロックを中心に—

宇土城跡の整備事業は、昭和56年度に着手し、現在（平成15年度）まで23年と長きにわたっている（第6図、第2表）。先述のとおり、第1ブロックは整備完了し、現在整備中の第2ブロックは、平成元年度より着手しており、17年度に完了予定である（写真15）。なお、第3ブロックは防災工事のみで遺構の整備は行われておらず、第4・第5ブロックは未着手である。

第2ブロックの整備が本格化した10年度には、時代とともに史跡整備のあり方や手法が変化し、立案されて15年余り経過した『環境整備計画』を見直す必要が生じたため、『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』を新たな基本計画として策定した。

千疊敷の整備については、縄張りの最終画期となる横堀跡（SD02）の掘削開始前後の可能性が高い16世紀後半から末頃の遺構を対象としている。9・10年度に千疊敷南側・西側の横堀跡、11・12年度は千疊敷の掘立柱建物跡の表示を行った。続く13年度に千疊敷北側横堀跡と、同南東側横堀跡の城破りに伴う石塔投棄の露出展示、15年度には千疊敷東側の横堀跡・虎口周辺の整備工事を実施した。16年度以降は虎口門跡・竪堀跡・切岸跡などの整備を行う予定である。

以下では、14年度に行った整備工事の概要を報告する。事業の組織は次のとおり。

14年度事業組織	事業主体	宇土市
	主管課	宇土市教育委員会文化振興課
	施工指導	宇土市教育委員会学務課施設係（15年度より学校教育課に改称）
	設計・監理	（有）中川建築設計事務所
	工事施工	トイレ本体工事：（株）平田建設 同電気設備工事：（有）プラムテック 同機械設備工事：（合）浦野商会
	工事検査	宇土市役所工事検査室
	指導・助言	文化庁文化財保護部記念物課 熊本県教育委員会文化課 史跡宇土城跡保存整備検討委員会 宇土市文化財保護審議会

年度	保存修理関連	備 考
昭和47年度		宇土城跡の千鳥敷部分が「名和伯耆 殿屋敷跡」として市指定史跡となる。
49年度		市立鶴城中学校移転に伴う事前発 掘調査（1次発掘調査）
50年度		同 上
51年度		西岡台貝塚の範囲確認調査。『宇土 城跡（西岡台）』本文編・史料編刊行
52年度	公有化事業開始	
53年度	公有化事業。3月12日に国指定史跡となる。	
54年度	宇上市が管理団体の指定を受ける。公有化事業	
55年度	公有化事業	
56年度	『史跡宇土城跡環境整備計画』策定 保存修理事業開始（第1ブロック）：盛土復旧・張芝・排水	
57～59年度	保存修理事業（第1ブロック）： 掘立柱建物跡遺構表示・解説板・ベンチ・張芝・東屋・水飲み場・園 路・車止等安全管理施設・植栽	2次発掘調査（58年度）
60年度	保存修理事業（第3ブロック、防災工事）：地質調査・表流水処理施設	
61・62年度	保存修理事業（第1ブロック、防災工事）：擁壁工・石積工 （第3ブロック、防災工事）：地質調査・表流水処理施設	
63年度	保存修理事業（第1ブロック、防災工事）：石積工・防犯灯	3次発掘調査。『宇土城跡（西岡 台）』Ⅱ刊行
平成元年度	保存修理事業（第1ブロック）：園路・排水・張芝・植栽 （第2ブロック）：盛土復旧 （第3ブロック、防災工事）：水平ボーリング、排水工	
2～4年度	保存修理事業（第2ブロック）：排水・張芝・植栽	4～6次発掘調査
5～6年度		7～8次発掘調査
7～8年度	保存修理事業（第1ブロック、防災工事）：擁壁・排水工	
9年度	保存修理事業（第2ブロック）：堀跡復元・法面保護・張芝 第2ブロックの遺構整備開始	9次発掘調査
10年度	『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』刊行 保存修理事業（第2ブロック）：堀跡復元・千鳥敷保護盛土	10次発掘調査
11～15年度	保存修理事業（第2ブロック）： 堀跡復元・掘立柱建物跡遺構表示（16・17・19号）・堀跡平面表 示・虎口復元・便所設置・石原山出土状況図展示	11～16次発掘調査。『宇土城跡 （西岡台）』Ⅲ～Ⅵ刊行

第1表 保存修理の経過

第3節 平成14年度整備工事

多目的広場のトイレ及び外構の整備工事を実施した(写真16)。『基本計画書』段階ではトイレは広場東側に配置予定だったが、利便性の面から再検討した結果、広場西側でアクセス道路や園路に近い方が、来訪者の利用に都合が良いことから場所を変更した。

施工に先立ち、造構面の確認のため多目的広場に4ヶ所の試掘地点を設定し、確認調査を行った。その結果、地表下約70cm付近に基盤層の輝石安山岩が現れたため、工事により造構に影響がないよう保護盛土した。

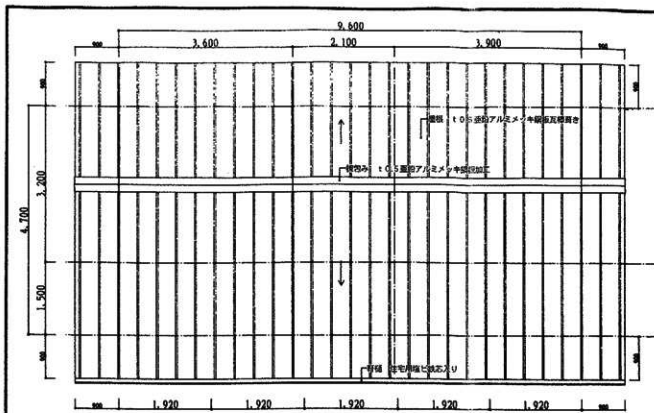
トイレは男子用・女子用・多目的トイレで構成される。車椅子での来訪者のために、入口中央にアプローチを設け、入口前面のピロティにはベンチや手洗い・足洗い場を設置した(第7・8図)。

工事の経過の概要は次のとおりである。前述の保護盛土工事完了後、床掘りや砕石、コンクリート打設などの基礎工事、地中下の管理用ピット部施工を行った。その後、鉄筋・型枠組立やコンクリート打設などの躯体工事、躯体上部の木工事(使用木材は杉)を実施し、屋根はガルバニウム瓦葺きで施工した。これら主要部の工事完了後は、外壁下地処理や特殊珪藻土塗りなどの左官工事やタイル工事、石工事、建具工事などの諸工事を行った。外構工事では建物周辺に砂利敷きし、その外側は張芝とした。

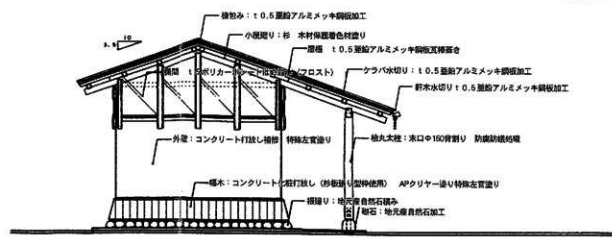
電気設備工事では、人感センサー照明やトイレ警報機などを設置し、機械設備工事では丘陵掘部の公共下水拵まで下水管、給水本管まで上水管を敷設した。



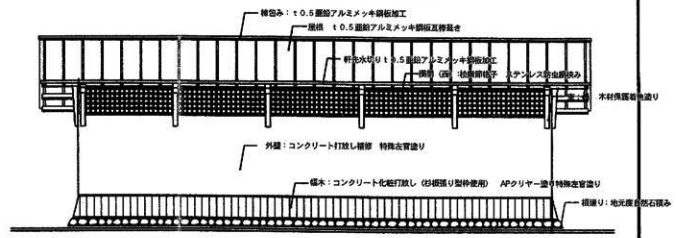
写真16 トイレ竣工写真(東より)



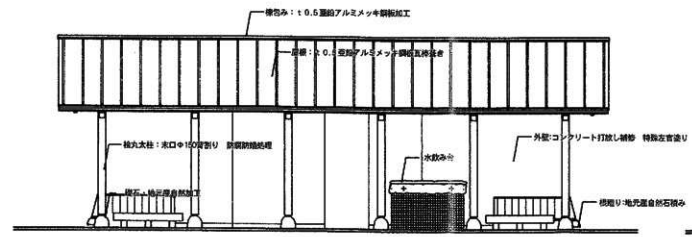
屋根伏図 S=1:80



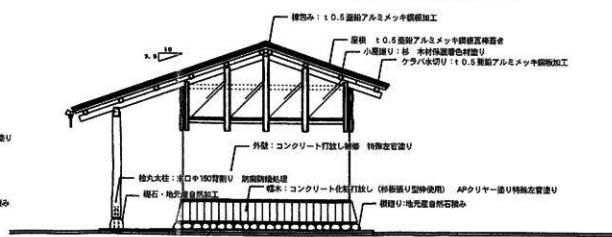
南面立面図 S=1:80



西面立面図 S=1:80



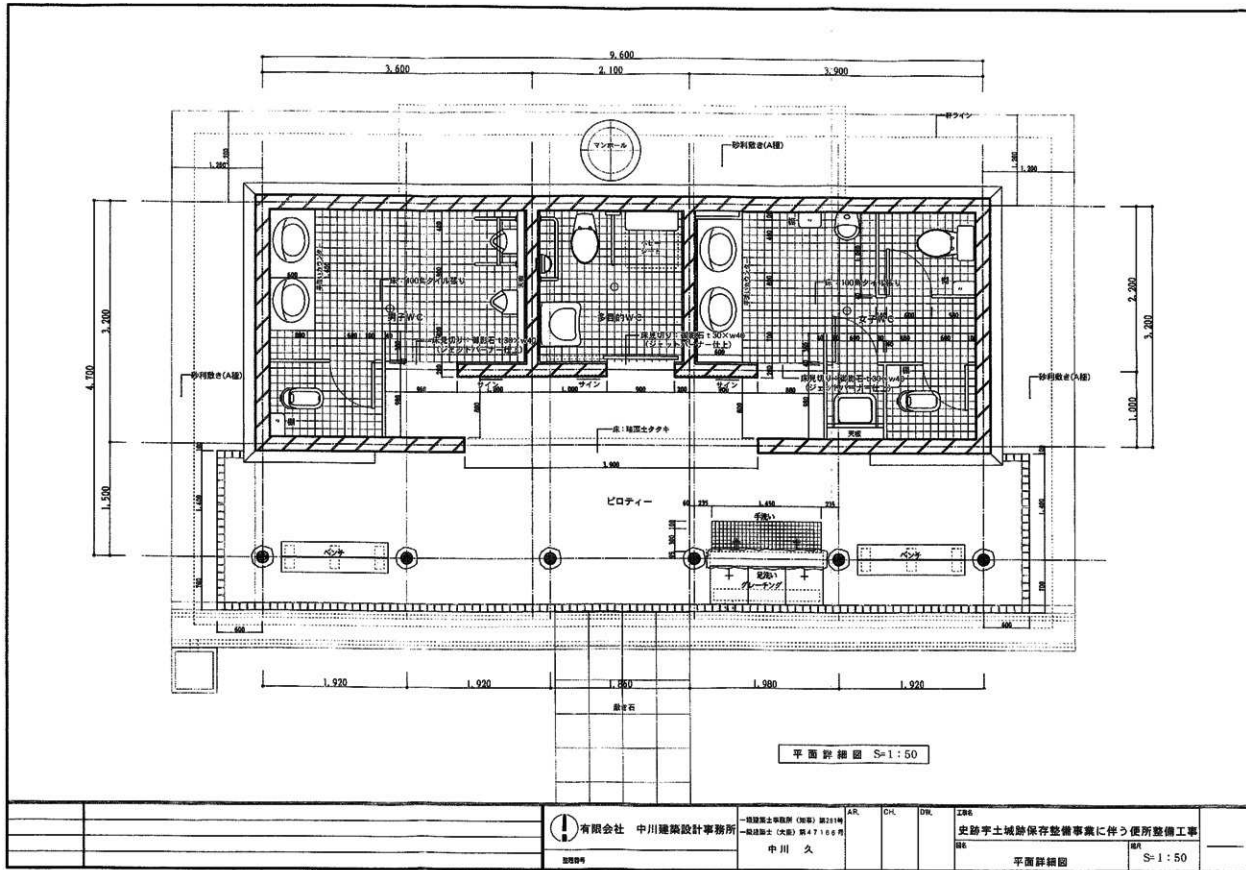
東面立面図 S=1:80



北面立面図 S=1:80

有限会社 中川建築設計事務所 〒986-0404 宮城県仙台市青葉区大森二丁目1-1-1	建築士事務所 (昭和三十九年) 第241号 建築師 (大正) 第47168号 中川 久	AR CL DR	工務 史跡宇土城跡保存整備事業に伴う便所整備工事 図 屋根伏図・立面図 縮尺 S=1:80
	09864		

第7図 トイレ立面・屋根伏図 (S=1/80)



第8図 トイレ平面詳細図 (S=1/50)

報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと（にしおかだい）							
書 名	宇土城跡（西岡台）Ⅶ							
副 題 名	発掘調査・保存整備事業概報							
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ号	第25集							
執 筆 者 名	藤本貴仁							
編 集 機 関	宇土市教育委員会							
所 在 地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査回数	調査面積	調査原因
		市町村 番 号	遺跡 番号					
うとじょうあと 宇土城跡	うとしじょう 宇土市神馬 町字千疊敷	43211		32° 40' 34"	130° 38' 54"	16次	459㎡	史跡整備
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
宇土城跡	中世城	中世	堅塁跡・横 堀跡・溝跡	土師製土器・瓦質 土器・青磁・染付・ 白磁・銅鏡		千疊敷北側の帯曲輪群を分 断する壘堀跡を確認。		

宇土城跡（西岡台）Ⅶ

—発掘調査・保存整備事業概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第25集

発行年月日 2004年3月31日

編集・発行 熊本県宇土市教育委員会

〒869-0433 宇土市新小路町95

TEL0964-22-6500(代) FAX0964-58-1005

印刷 社会福祉法人 コロニー印刷

〒860-0051 熊本市二本木3丁目12-37

TEL096-353-1291(代) FAX096-353-1294

